
この恋、諦められますか？

鶴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この恋、諦められますか？

【NZコード】

N9695A

【作者名】

鶴

【あらすじ】

好きな人に言われた『好きな人がいる』宣言に、百合が出した答えとは……？

誰もいない教室は、西日を浴びてなにもかもを朱に染める。少年は一人、誰もいない教室の窓から夕陽を眺めていた。校庭では野球部が汗を流している。ちょっと今まで、あそこに自分がいたとは思えなかつた。

藤本 一喜、野球部所属。ポジションはピッチャー。今年の夏、甲子園で脚光を浴びた人物である。

しかし甲子園では一勝も出来なかつた。一回戦の相手が昨年の優勝校であつたからだ。

世間では好カードと言われていた試合、正にその通りとなつた。壮絶なる投手戦、互いに2対2で延長に入つた。

誰もが再試合になると思った延長15回裏、体力の限界だった一喜の球が少しだけ浮いた。

サヨナラ本塁打。

夏が……終わつた。

しかしながらの表情は明るかつた。誰も一喜を責める者もいなく、むしろ感謝をされたくらいだ。

夕陽を眺めていた一喜の目頭が少し熱くなる。

「なーに黄雀てるのよ。」

不意に後ろから声を掛けられ、少し驚きながらも振り向く。

「……なんだ、百合か。」

「なんだつてなによー...。」

堺 五百石は野球部のマネージャーだった。過去形なのは引退したから。

よく一喜とば馬鹿な言い争いばかりしている。一喜曰く『五百石なんて名前のくせにおしとやかじゃないのはおかしい!...』らしい。

「で、なんで外見てるの?..」

「ちよつとなー。」

「ちよつとつてなによ?..」

「俺にはプライベートも無いのかよ。」

「まあまあ、私とアンタの仲じやない。」

「.....まあちよつとした悩み」とだ。」

「悩み?アンタが?.....熱があるの?..」

「.....俺が悩みを持っちゃいけないのかよ。」

「いや、いつも能天気なアンタが悩み」となんて珍しいなあ、なんてあつ、わかった!—また野球のことでしょう?」

「ハズレ。」

「じゃあなんなのよー...言わないと.....」

「わつ、わかつた、まつよー。」

拳を振り上げる百合一 喜は思わず慌てた。

「…………な……が……た。」

「え？ もう一回誓つて？」

「だから……好きな子が出来た……」

「…………くつ。」

百合の口からは思わず甲高い声が出てしまった。
そもそものはず、一喜は今まで恋愛に興味がないとばかり思っていた。それに……

「くつ、くえ。相手は誰よ？」

「馬鹿……そればかりは言えねえよ……」

「…………で、なんで悩んでるの？」

「いや、告白すげきがどうかを……」

「したらいいじゃない、告白なんて。」

「ずいぶん軽く言つてくれるなあ。」

「大丈夫よ、アンタ意外と顔はいいから。」

「意外ってなんだよ。」

「もひすくぐ~~実験~~なんだから早こうつちの方がいいんじゃないの？」

「やうかあ……うーん、考えてみるわ。」

「フリれたらお姉さんが慰めてあげるわよ。」

「はつ、〔冗談じやねえよ。んじやな。〕」

一喜は机の上に置いてあった鞄を軽く持ち上げて、教室を後にした。

「聞いたわよ～！！」

突如、掃除用のロッカーから不気味な声がして、百合は驚いた。
鈍い音の後、ロッカーから出てきたのは同じ野球部のマネージャー
だつた東雲 霞^{しののめ かすみ}であった。

「ちょっと、霞！？ アンタなんでロッカーなんかに入つてたの！？」

「こやあ、わつきまで『まつちゃん』に追われててさあ、隠れてたつてわけよ。」

『まつちゃん』とは百合達のクラスの担任で、密かに霞と交際している。

「ちょっと宿題サボつただけなのに追い回すんだもん、疲れるわあ。」

「

「それは靈が悪こんじや……」

「それよつと金アーッ……アンタ何で言わなかつたのよ……」

「何を?」

「だかりあーーーアンタが一喜を好きだつてんとーーー。」

「こや、別に喜ひとじやなこい……」

「なに喜ひてるのよーーーのままだとアンタ、一喜が誰かに取られ
るわよーーー。」

「…………やうなつたらそくなつたよ。私は一喜が幸せなりそれでいい
わよ。」

「アンタ……ひよつと向悲劇のヒロイン演じてゐるの……ひよつ
と待つてよーーー。」

教室から出ていった百合を追って掛かひつてひで靈は肩を掴
まれた。

「かあーすうーみーーー宿題が残つてゐるべーーー。」

「まつりやとーー今それどひーーー。」

「問答無用ーーー。」

靈は百合を追つてなく職員室に拉致されていった。

霞が自宅に帰ってきた時には既に夜であった。

『愛の教育的指導』と言しながら宿題が終わるまで帰してくれないのはどうだらう、と霞は考えていた。

今度テーーー禁止にしてやるつ！

勝手に誓いを立てていた霞のポケットが振動していた。まつりちゃんとお揃いのストラップを揺らしながら表示を確認する。

液晶には見慣れた名前が浮かびあがっていた。

「もしもしー、一喜？」

『おー、霞。起きてたか？』

「今帰つてたといひよ。まちがひんこイジメられただのよ。」

『お前……学校でそつこいプレイはちよつと……』

「何考えてるのよーー宿題やつてなかつたから残されてただけよー！」

「！」

『なーんだ。教師と生徒の秘密』みたいことだと想つたのよ。

「で、Hロー喜君は何の用かしきっ。」

『ああ、ちょっと相談なんだが……』

「相談?なんの?」

『実は……』

百合は家に帰つてから先程の一喜の様にぼんやりとしていた。

……一喜に好きな人、かあ。

高校に入った時から知り合いだった一人。百合が一喜に恋をしたのは丁度一年前。

地区大会の準準決勝で敗退したその日、百合が見たのは一喜の涙だった。

確かに一喜の体調は悪かった。風邪を押してまで登板したのだが、打ち込まれて6失点。結果、そのまま逃げ切られた。

あの時の一喜の涙に百合の気持ちは全て一喜に向かった。

私……どうしよう。

気づけば涙が頬を伝っていた。

結局一睡も出来ずにほんやうとしていた百合は、洗面所の鏡の前で思わず呟く。

「酷い顔……」

そんな顔と決別するかの様に冷水を顔に掛ける。涙の跡も水と共に流れていった。

気づけば教室の前まで来ていた。そっと扉を開けたとき、肩を叩かれた。

「よつ。」

「…………よつ。」

「なんだよ、元気ねえなあ。」

「…………喜びや元気が有り余ってるみたいだけどっ。」

「いや、昨日お前に言われて考えてみたんだけじゃ。お前の言つ通り今日、告白する」とこしたわ。」

その言葉に百合の心臓が跳ねた。

「…………そう。頑張ってね。」

精一杯の空元気を見せる百合。

「ああ、ちやんと報告すっから。」

一喜は先に教室に入り、クラスの友人と挨拶を交した。百合も気持ちを切り替えて、教室に入った。

あつと言ひ間に授業が終わった。いや、百合にとっては終わってしまったと感じた。

机の教科書を鞄に移していくと、霞が百合の方へ向かってきた。

「百合、百合……覗きに行かない？」

「何を？」

「そりゃ わかるよ——喜の田舎シーンよ。」

「…………別にいいよ。」

「そんなこと言わないでさあ、屋上にこよーーー。」

「ちよつ、霞ー?」

百合は霞に腕を掴まれて屋上まで走らされたことになつた。

屋上には人の気配はまだ無かつた。百合と靈は給水タンクの裏に隠れていた。

「やっぱ止めようよ、覗きなんてしたって意味ないよ。」

「いいから、いいから。それにしても遅いわね……ちょっと様子見てくるわね。」

まるで忍の様に素早く屋上の扉まで近付く霞を見ながら溜息を吐いた。頭の上に既に太陽は無く、西に傾いていた。

ガチャ

扉が開く音がして身をこわばらせる百合。入ってきたのは一喜と女性だった。黒い髪が顔にかかり、顔がよくわからないが、雰囲気で美人だと百合は悟った。

二人の口は動いているが、風が強く、聞こえない。

百合の心臓は跳ねっぱなしだった。百合は苦しさに負けそうになりながらも一人を見つめる。

次の瞬間、二人は抱き締めあっていた。百合の血が一気に冷たくなったのが自分でもわかった。

二人はそのまま顔を見合させて……

「駄目ーー！」

氣付いた時には百合は立ち上がり叫んでいた。

「ゆ、百合ーー？」

「駄目！ーー駄目駄目駄目ーー！」

まるで駄駄をこねる子供の様に叫ぶ百合。その瞳からは大粒の涙が次から次に溢れ落ちていった。

「私だつて……私だつて一喜が好きだもん!!一喜が幸せならいいなんて大人ぶつてたつてやつぱり一喜が好きなんだもん!!」

百合は自分の想いを全てぶつけた。息はあがり、涙で顔はグシャグシャになっていた。

「……………」

女の方が肩を震わせながら手で口を抑えている。

「……………はははははーーー」

突然大声で笑い出した女に百合は驚いた。

…………あれ?

百合はその声を聞いたことがあった。といつよつとさつきまで聞いていた……

「ゆーり、めぢやくぢや可憐いだ。」

黒髪に手を置き、そのまま持ち上げるとこも同じしている栗色の髪がなびいた。

「か……かす……み……？」

「ひんぱん。」

『いや、少し百合子に引つ掛けでみたんだけど……あんまし効果が無かつたな。』

「『あんなの、騙すつもつは……めちゃくちゃあつたんだけ。』

靈は口を出しながら頭を搔いていた。

「わっ……私の涙を返して欲しいわ。」

頬を膨らませながら顔を向いている百合子。

「だつて昨日わあ……」

『実は……俺、百合子が好きなんだ。』

「へえー……つー……じゃあアンタわつも教室で書つてたのはー?』

『はー何でお前、教室のこいつ……わたしは覗いて』

「わっ、そんなことよつー…ひつね?』

「ふうん……！、一喜、いいアイディアが浮かんだわ！！」

『どんな？』

「それはね……」

「つてなわけなのよ。」

「アンタ達はホントのくな」と考え……ちよっと待つて……

「どうしたの？」

「今……一喜が私を好きって言つた？」

百合は慌てて一喜を見る。一喜は離れたところで夕陽を見ていた。

「そつ、晴れても一人さんは両想いでした～、つてオチも何もない
結末よ。」

霞が愚痴をこぼしているが、最早百合には聞こえていない。

……一喜が……私のこと？

「せつてど、お邪魔虫は帰りますかな。一喜――！」

霞の大声に反応する一喜。

「おー！…サンキューなー！」

「今度お昼奢りねーーー！」

それだけ言うと足早に屋上を後にした露。携帯を開いて短縮を押す。

はい？

「おひがさん、今から一丁こなー..」

『施設田舎者ニ工禁至ル』

「氣にしない、氣にしない、あれだけみせつけられたやねえ……」

ん? なんか言ったか?

なんでもなし

「ほんとい、何考えてるのよー。」

「……悪い。」

「もう…… とんだ赤っ恥かかされちゃったわよ。」

「俺や…………野球しかやつてこなかつたから、いへこのよくわからなくて……」

۱۰۷

百合の言葉には既に怒りはなかつた。

「じゃあ聞かせて。」

「何を？」

「決まってるでしょ!? 部長が生田……」

-
^?
[

「アンタ、私に誰わせでそれでおしまいだとでも思ってるのであるの!?」

二

うん、じゃないわよ…… 嘘の口から聞きたいの。

「この時の百合は、とても可愛く感じられた」とはない、と緊張しながらも

「……好きだよ。」

「もつと大きな声で！！」

「俺は！！堺百合が！！大好きです！！」

一喜の顔は夕陽よりも真っ赤になっていた。もちろん百合の顔も。

「私も……私も大好き！！」

夕陽は一人を包みこみ、二つの影はやがて一つに重なった。

(後書き)

やつぱりハッペンドでした(笑)
評価、感想、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9695a/>

この恋、諦められますか？

2010年10月28日08時37分発行